

京都大学時代に出会った人々(概要)



日本文学研究者(文化勲章受章)
ドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授

長年の夢が叶い、私が京都大学大学院文学研究科に留学できたのは、1953(昭和28)年のことでした。戦時中、アメリカ海軍の日本語学校で勉強するうちに日本に関心を持つようになったのですが、なかなか訪日の機会がなく、終戦から8年後、アメリカの財団の援助を受けて、ようやく京都への留学が実現しました。

当時、留学生にとって下宿先探しは大変でしたが、私は戦友の同志社大学教授のおかげで、素晴らしい下宿先に恵まれたのです。立派な門構えに囲炉裏や茶室があり、静寂に包まれ、そのうえ奥さんの手料理がおいしいという申し分ない下宿から、京都大学に通うことができました。

京都大学で受講したのは、野間光辰 教授の講義。

テーマが『曾根崎心中』に決まった時は、本当にうれしかった。ケンブリッジ大学時代に読んで感激し、英訳したいと思っていました。

留学中は中国文学の吉川幸次郎 教授、フランス文学の桑原武夫 教授など、専門以外の先生とも親しくなりました。特に桑原教授は、日本文学選集の編集をしている私に、石川啄木の『ローマ字日記』を勧めてくれ、私の啄木研究のきっかけを与えてくれた方でした。

学生との交友も広がりました。知られざる古典の掘り起こしに情熱を燃やした松田修さん、傑作とされる古典作品の退屈さを証明しようとした濱田啓介さん、のちに谷崎潤一郎の助手となった伊吹和子さんなど、個性豊かな友人を得ることができました。また生涯の友との出会いもありました。下宿先が同じだった、教育社会学者の永井道雄さんです。私は古典のことしか頭になく、新聞すら読まなかったのですが、永井さんのおかげで現在の日本にも関心を持つようになりました。永井さんは私より半年ほど年下でしたが、師でもあり、真に心が通い合う友人でした。

最後に、京都は本当に素晴らしいところです。私は93歳となり、友達の多くに会えなくなって寂しいのですが、60年以上も前に京都大学で過ごした歳月は本当に幸せでした。



(総務部(渉外課))